

## 加藤睦夫教授退任記念論文集の刊行にさいして

経済学部長 大 藪 輝 雄

加藤睦夫先生は1988年3月末日をもって、定年により立命館大学教授の職を退かれます。先生は1959年10月より28年6か月の長きにわたり、立命館大学経済学部において研究教育の仕事に専念されてきました。立命館大学経済学会は、この間の先生の多大の御功績をたたえ、ここにささやかながら御退任記念論文集を『立命館経済学』に特集することとしました。

先生は山梨県の御出身ですが、1948年に旧制第一高等学校を経て、東京大学法学部政治学科を御卒業になっています。その後配炭公団や財政経済新聞社、金融財政事情研究会などを経て、1954年より大蔵省官房調査課に勤務されていました。そして5年目の1959年10月に立命館大学経済学部助教授に就任され、また1963年4月から現在までは経済学部教授として、研究と教育の仕事に専念されてきました。

この間1967～69年の2か年は、学生部長として大学の直面した困難な問題の解決にあたられ、また1974年には経済学部長・大学院経済学研究科長として学部と大学院の運営にあたられました。さらに1964年から86年までは日本財政学会理事として学会の発展に貢献されました。

先生が立命館大学に来られるようになったのは、私の記憶では、井上晴丸先生の御推薦によるものだと思っています。1959年4月に井上晴丸先生が経済学部に来られました。井上先生の御紹介で、その年に退職された財政学の藤谷謙二先生の後任として、当時大蔵省の官房調査課に勤務しておられた加藤先生をお招きすることになったわけであります。大内兵衛先生の御推薦によるもので、井上先生はその当時、先生独特の言いまわしで私など若い者に、「今度財政学で力持ちの先生が来られるから」と言っておられたのを、なつかしく思い出します。

先生の御研究の分野は財政学です。とくに戦後日本の財政史についての御造詣が深く、膨大な出版である大蔵省財政史室編『昭和財政史』（東洋経済新報社刊）の終戦から講和までの部分を担当しておられます。これは実証的な資料集ですが、根本資料によって戦後日本の財政史を語らせようとするもので、極めて価値の高い研究であります。

こうした実証的研究をふまえて、『日本経済の財政理論』（青木書店刊）においては、日本資本主義の運動法則との関連における財政というテーマを追求しておられます。財政学の研究がともすれば財政をそれ自体として取り上げるといった場合が多いのに対して、先生の御研究の優れた特色を示すものであります。またその他にも、マルクス経済学の立場からの租税論の理論的研究において、多くの成果をあげておられます。

教育や学部行政の面でも先生は大きな貢献をしておられます。先生は学部主事として、経済学部のカリキュラムの整備に精力的に取り組まれ、その大枠は現在でも生かされています。学生部長や学部長としても、当時の非常に困難な問題に取り組まれて、情勢を切り開いて来られました。また、学部のゼミの指導にはとくに熱を入れて取り組まれ、経済学部がゼミを重視するという気風を早くから培って来られました。さらに、大学院における先生の御指導の下に多くの若手研究者が育ってきております。

先生の学風は一言で言いますと、「重厚で緻密」であります。細部にまで目が行きとどいていてバランス感覚がよいともいえます。先生は基が大変お強いのですが、基の方で言う「読みが深い」というのが先生の学風にもあらわれているのではないかと思います。

先生が経済学部を去られるいま、私どもの惜別の情はひとしおであります。今後とも私ども後輩を引き続き御指導下さいますようお願い申し上げますとともに、いっそうの御活躍と御健勝をお祈り申し上げて先生をお送りする言葉といたします。

1988年2月